



島津製作所「次世代知財業務自動化プラットフォーム：Genzo AI」調査レポート

1. Genzo AIの概要と設立背景

- Genzo AIは、島津製作所が2026年4月に設立する知財業務自動化SaaS専門子会社（株式会社Genzo AI）で、島津90%・IP Agent10%の共同出資です。^{[2][3]}
- 島津知的財産部が社内向けに独自開発し運用してきた生成AIプラットフォームを、社外の企業・大学向けSaaSとして提供するためにスピニアウトした位置づけです。^{[1][2]}
- 本社は島津製作所本社内（京都市中京区）、2026年4月中旬からサービス提供開始予定で、2030年度に売上15億円・約320社導入を目標としています。^{[3][2]}

経営体制は、代表取締役社長に川村亮太（島津）、取締役役にIP Agent代表の坂本聡・島津知財部長の阿久津好二、顧問に元キャノン知財本部長の長澤健一が就任する構成です。^[2]

2. プラットフォームのコンセプトと開発実績

- コンセプトは「次世代知財業務自動化プラットフォーム」「Human-in-the-Loop型知財AI」で、AI単独完結ではなく、知財実務家のレビュー・判断を前提とした設計です。^{[1][2]}
- 島津知財部内では2023年から運用され、以下のような社内実績が公表されています。^[2]
 - 外部委託コスト年間約8,000万円削減
 - 発明届関連業務工数を約50%削減
 - 他社特許スクリーニング業務の約90%を自動化（手作業削減）
 - 新人でも配属直後から一定水準で業務遂行可能になるなど、教育・標準化効果

開発思想として、「ロジックで書ける知的労働は生成AIに任せ、人は判断に集中」「ベテランの暗黙知をプロンプト・ワークフローとして形式知化」が明示されています。^{[4][2]}

3. 機能構成とリリースロードマップ

Genzo AIは知財業務のライフサイクル全体をカバーする6モジュール構成で、モジュールごとに組み合わせ利用するSaaSです。^[1]

3.1 先行リリース（2026年4月中旬）コア機能

1. 届出モジュール（発明提案書支援）

- 開発資料・技術メモを投入し、発明提案書（発明届）を自動生成する機能です。^[1]
- 発明届段階での必要情報の抽出・構造化をAIが行い、担当者がレビューして確定させる運用を想定しています。^{[2][1]}

2. 翻訳モジュール（英語・中国語）

- 日本語明細書を対象に、英語・中国語への高精度翻訳を行う機能で、4月時点から利用可能です。^[1]
- 2026年7月以降に、明細書本文だけでなく図面内テキストの翻訳にも対応予定とされています。^[1]

3. 中間処理モジュール（拒絶理由通知対応）

- 拒絶理由通知への対応案を論理的に構築し、審査官の判断を評価し、補正案を提示するモジュールです。^[1]
- 審査官の指摘内容の整理、論点の抽出、補正方向性の提案といった「対応方針設計」の負荷を下げることを狙っています。^{[2][1]}

3.2 2026年夏以降に順次追加予定の機能

1. 出願モジュール（明細書ドラフト生成）

- 発明届モジュールと連携し、請求項・明細書案のドラフトを生成する機能で、夏以降にリリース予定です。^[1]

2. 先行文献調査モジュール

- 特定出願・技術テーマを指定すると、関連先行文献の抽出と特許性判断（新規性・進歩性評価）をAIが行うモジュールです。^[1]

3. FT0（侵害予防）モジュール

- 開発資料を投入し対象国を選択すると、Patentfieldと連携して検索～一次スクリーニングまで自動実行します。^[1]
- 非専門家でも「危ない領域の有無」を一次チェックできるようにする設計です。^[1]

4. 契約書レビューモジュール

- メールPDF・契約書案をインプットし、簡易アンケートに答えるだけで、不利条項の指摘と修正案を自動生成します。^[1]
- 共同研究・ライセンス契約等、知財関連契約の一次レビューの効率化を目的としています。^[1]

4. 技術・提供形態・セキュリティ

- 提供形態は年間契約のクラウドSaaSで、基本的にユーザー数無制限（利用モジュールと規模に応じた年額100～1500万円）です。^{[2][1]}
- OpenAIやGoogleのAPIを利用しつつも、プロジェクトデータがこれらのサーバーに残らない構成とし、国内クラウド（AWS等）上での管理を謳っています。^[1]
- UIは「ファイルをドラッグ&ドロップし、生成ボタンを押すだけ」で、対話的に追加質問や再生成を行えるチャット型インターフェースです。^[1]

導入面では、IP Agentが中心となり、

- 初期設定・プロンプトチューニング
- 操作研修・定着支援
- 業務フローの見直し提案
- 社内IT・セキュリティ部門向け説明を含むオンボーディングを一括で提供することが強調されています。^{[2][1]}

5. 他の知財AIサービスとの比較（ポジショニング）

公開情報・調査レポートを踏まえると、知財AIサービスは大きく次の類型があります。^{[5][6]}

- A: 汎用LLM+特許DB連携型（要約・ざっくり分析）
- B: 調査・FTO特化型（検索UI+AIサマリ・クラスタリング）
- C: 明細書ドラフト特化型
- D: 契約レビュー・リーガルテック型
- E: 業務自動化プラットフォーム型（複数業務を統合）

Genzo AIはEに分類され、A～Dの要素を知財部ワークフロー単位で統合している点が他サービスとの大きな違いです。^{[2][1]}

5.1 明細書ドラフト系との比較（AI Samurai, appia-engine, Patent Integration）

- AI Samurai :
 - アイデア入力から請求項・明細書ドラフト、中間対応、クレームチャート、審査シミュレーションに強み。^{[7][8]}
 - 拒絶理由通知対応では、引例との一致点・相違点チャート作成→補正案→意見書・補正書ドラフトまでをAIで繋ぐ構造です。^{[8][9][7]}
- appia-engine (Smart-IP) :
 - 明細書作成・中間対応に特化し、生成AIで請求項・明細書本文を自動生成、作成時間9割削減などの事例を前面に出しています。^{[10][11][12]}
- Patent Integration+サマリア :
 - 特許検索・分析SaaSに、AIアシスタント「サマリア」を載せ、拒絶対応・明細書作成支援機能を追加。^{[13][14][15]}
 - 「特許請求の範囲から」「明細書下書きから」「ゼロから」の3導線でドラフト生成し、人間主体の実務を前提とする設計です。^{[16][13]}

Genzo AIは、明細書ドラフト単機能よりも「発明届～中間～翻訳～FTO～契約レビューまでを一つのOSで」という全体最適を主眼としており、中間処理や翻訳・契約も含めた総合自動化が特徴になります。^{[2][1]}

5.2 FTO・調査特化系との比較

- Patentfield, PatentSQUAREなどの調査・分析系は、FI/Fターム・セマンティック検索・クラスタリングといった調査の“深さ”に強みがあります。^{[17][18][5]}
- Genzo AIのFTOモジュールは、Patentfieldと連携し「開発資料を投げるだけで一次スクリーニング」する設計であり、非専門家も含めた一次チェックの自動化に振れています。^[1]

調査の深掘りそのものは専門ツールに分があり、Genzo AIは「知財部や開発部での日常的な一次判断」を担う立ち位置と整理できます。^{[5][1]}

5.3 大学・研究機関向けの適性

- Genzo AIは、少人数で知財を担当する中堅・中小企業および大学・研究機関を主要ターゲットとし、ユーザー数無制限モデルで研究者を巻き込んだ利用を想定しています。^{[2][1]}
- 他の大学向け知財AIは、技術シーズ可視化や特定分野のポートフォリオ分析にフォーカスしたのもも多く、Genzo AIは「実務オペレーション全体を少人数で回すためのOS」に近い性格です。^{[6][19][20][21]}

6. 中間処理機能とAI Samuraiとの違い（要点整理）

- Genzo AI中間処理：
 - 知財部ワークフローの1モジュールとして、拒絶理由通知への対応案構築・審査官判断の評価・補正案の提示までを一体でサポート。^[1]
 - 社内説明・決裁資料との親和性が高い「応答案一式」を意識した設計と解釈できます。^{[2][1]}
- AI Samuraiの中間対応機能：

- 一致点・相違点クレームチャートの自動生成→補正案→意見書・補正書ドラフトまでを、審査シミュレーション機能と連携させた“技術・法務コア”特化の機能群。^{[9][7][8]}
- クレームチャートや特許性シミュレーションといった可視化・分析面が強く、案件単位の中間処理に特化しています。^{[7][8]}

7. 導入検討上の論点（実務視点）

Genzo AIの性格を踏まえた導入検討の論点は、おおよそ次の通りになります。^{[6][5][2][1]}

- 「知財部の標準OSを作りたいか」「特定タスクだけを強化したいか」
 - 前者ならGenzo AIのようなプラットフォーム型、後者ならAI Samuraiやappia-engine、調査特化ツールの方がフィット。
- IT・セキュリティ要件
 - 国産LLM限定、特定クラウド縛り、オンプレ要件などが強い場合は、PoCでGenzo AIの技術要件を確認しつつ他ツールとの比較が必要。
- リソース構成
 - 少人数で発明届・ドラフト・中間・翻訳・契約まで回している組織ではGenzo AIの一気に通貫性が活きる一方、調査部門やドラフト専任チームが充実している組織では、特化ツールとの組み合わせも現実的。

1. <https://www.genzo-ai.co.jp>
2. <https://www.shimadzu.co.jp/news/2026/acmnk57uqb3579ay.html>
3. <https://www.kobe-np.co.jp/news/zenkoku/compact/202603/0020164603.shtml>
4. <https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/f1aafe913481f23d1c41.pdf>
5. <https://growing-ip.com/?p=1258>

6. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/d1d63f2a696b2774dbd5.pdf>
7. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000288.000021559.html>
8. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/38e78e3c2ba3ba97d48f.pdf>
9. https://news.livedoor.com/pr_topics/detail/30760607/
10. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/f7ceaff0b2d39869d95c.pdf>
11. <https://worldhacks.co.jp/blog/f6v08212uy/>
12. <https://appia-engine.com>
13. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000020.000086119.html>
14. https://news.livedoor.com/pr_topics/detail/30801861/
15. <https://patent-i.com/ja/buy/>
16. <https://yoroziupsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/610f8e4a2d25a0c07bac.pdf>
17. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000015.000086119.html>
18. <https://www.panasonic.com/jp/business/its/patentsquare.html>
19. <https://aidiver.jp/news/detail/60>
20. <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000416.000042056.html>
21. https://jpn.nec.com/press/202601/20260119_01.html